新版

じゅうろうにゅうどうどのとう 十郎入道殿等、さじきの尼御前、一々に見させ給うべきじゅうろうにゅうどうどのとう 桟 敷 あまごぜん いちいち み たも この文は富木殿のかた、三郎左衛門殿、 文永9年(72)3月20日 がつ 大蔵とうのつじ おおくら 51 歳ない もんかいちどう

人々の御中へなり。

ひとびと おんちゅう

きょう 鎌倉に軍に死せる人々を書き付けてたび候え。かまくらいくさし、ひとびと、かっった給できるら かまくらいくさ ひとびと

外典抄、・ の人々もちてわたらせ給え。 ひとびと 持 文句の二、玄の四の本末、もんぐにばんがしほんまつ 渡 勘文・宣旨等、これへかんもん せんじとう せんじとう

るとも、 じんしん 人身をや。 癩人なお 命 を惜しむ、 いかにいわんや壮人をや。 の身の死するとなるべし。牛馬なお身を惜しむ、いわんや ほとけと 世間に人の恐るるものは、火炎の中と、 仏 説いて云わく「七宝をもって三千大千世界に布き満つ ひと 手の小指をもって仏経に供養せんにはしかず」 らいにん こゆび おそ いのち しっぽう ぎゅうば ぶっきょう くよう さんぜんだいせんせかい 刀剣の影と、 つるぎ そうにん

しゅい

取意。

しんみょう 雪山童子の身をなげし、せっせんどうじみと投 楽法梵志が身の皮をはぎし、 ぎょうぼうぼんじ かわ

ぶっぽう 仏法を習えば 必 ず 仏 となる。 身 命 を捨つる人、 他の 宝 を 身命に過ぎたる惜しきもののなければ、これを布施として なら かなら ほとけ 成 しんみょう たから

まさる身命を捨つべきや。世間の法にも、 仏法に惜しむべしや。また、 しんみょう せけん 財宝を仏法におしまんもの、ざいほう。ぶっぽう。

惜 ほう じゅうおん 重恩をば命を

捨てて報ずるなるべし。

また、主君のために命を捨つる人はすくなきようなれど しゅくん かずおお なんし いのち いのち ひと にょにん おとこ

ŧ, めに命をすつ。 いのち その数多し。 男子ははじに命をすて、女人は男のたりなんし、恥いのち、潜いには、おとこ

池 魚は命を惜しむ故に、池にすむに池の浅きことを歎いて、うおいのち、おいゆえいけんはいのち、おっぱんだいけんはいけんあさいなげ の底に穴をほりてすむ。しかれども、えにばかされて釣をできます。堀の住

む。鳥は木にすむ。木のひききことをおじて、木の上枝にむ。鳥は木にすむ。木のひききことをおじて、木の上枝に

すむ。しかれども、えにばかされて網にかかる。人もまた

唯 化 あみ 掛 ひと かくのごとし。世間の浅きことには身命を失えども、大事かくのごとし。世間の浅きことには身命を失えども、大事だいじ の仏法なんどには捨つること難し。故に仏になる人もなかぶっぽう せけん

にどう 二道のごとし。されば、昔の大聖は時によりて法を行ず。にとう るべし。 の行となるべし」と責めしかば、身をすつ。肉をほしがら ぎょう 雪山童子・薩埵王子は、「身を布施とせば法を教えん。菩薩せっせんどうじょったおうじみなせいませいほうましいできっ せっせんどうじ さったおうじ ぶっぽう 仏法は摂受・ しょうじゅ しゃくぶくとき 折伏時によるべし。譬えば、 だいしょう とき にく 世間の文武 ほう ぎょう

ざる時、身を捨つべきや。紙なからん世には身の皮を紙とときみょす。かみかみ

等は畜生のごとし。智者の弱きをあなずり、王法の 持戒・正法を用いん世には、諸戒を堅く持つべし。じかいしょうほう もち よ しょかい かた たも 大師等のごとく、 法師・法道三蔵等のごとく、王と論じて 命 を軽うすべし。 どうきょう だいしとう と瓦礫と、牛・驢の二乳を 弁 えざる時は、天台大師・伝 教 しやっきょう ほっし ほうどうさんぞうとう 道 教をもって 釈 教 を制止せん日には、道安法師・慧遠 釈教の中に、 ちくしょう がりやく 畜生の心は、 ちくしょう 筆なからん時は骨を筆とすべし。
をで ほね ふで しょうほう なか こkろ <u>_</u>" もち しょうじょう だいじょう ごんきょう じっきょうぞうらん しやっきょう 小乗・大乗、権経・実経雑乱して、 弱きをおどし、強きをおそる。当世の学者 よわ だいしょう ごんじつ 大小・権実・顕密を強盛に分別すべし。 ににゅう せいし わきま おう しょかい けんみつ ごうじょう つよ ろん ひ とき かた 破_{はかい} いのち 恐 どうあん ほっし てんだいだいし ・無戒を毀り、 ふんべつ おうぼう むかい かろ とうせい じゅきょう 邪を みょうじゅ でんぎょう えおん

おそる。 諛臣と申すはこれなり。強敵を伏して始めて力士をゅしん もう ごうてき ふ はじ りきし

,^知

しる。 悪王の正 法を破るに、 あくおう とき しょうほう やぶ 邪法の僧等が方人をなして智者を じゃほう そうとう こころ かとうど も の かなら ほとけ

になるべし。 れい 例せば日蓮がごとし。これおごれるにはあら にちれん

失わん時は、師子王のごとくなる心をもてる者、必ず仏

ず。正法を惜しむ心の強盛なるべし。

こころ

ごうじよう

しょうほう

おごれる者は、 必ず、強敵に値っておそるる 心 出 来す も の しゅら かなら ごうてき たいしゃく こころしゅったい ねっち

るなり。例せば、修羅のおごり、帝釈にせめられて、 の 蓮の中に小 身と成って隠れしがごとし。正 法は、一字 はちす しょうしん しょうほう 無熱池

なり。 らん」 む 弟子等、必ず仏法を破るべし。「師子身中の虫の師子を食でしょう かなら ぶっぽう やぶ まんろん より破るべし。薬師経に云わく「自界叛逆の難」と、これゃぶ また合戦あり。外道・悪人は如来の 正 法を破りがたし。仏 万論を習学すれども、時機に相違すれば叶うべからず。 一句なれども、 ほう 宝治の合戦すでに二十六年。今年二月十一日、十七日、 等云々。 とううんぬん かっせん ľ しゅうがく 云々。金光明経に云わく「三十三天、 にんのうきょう かっせん うんぬん 仁王経に云わく「聖人去らん時は、七難必ず起こ こんこうみょうきょう だいかほう ひと 大果報の人をば他の 敵 やぶりがたし、親しみ げどう 時機に叶いぬれば 必ず得道なるべし。千 にじゅうろくねん ことしにがつじゅういちにち じゅうしちにち あくにん にょらい しょうほう かな じき しょうにん さ ほか そうい かなら かたき さんじゅうさんてん とき とくどう 成 かな しちなんかなら おのおのしんこん 各 瞋恨を した せんきょう

云々。 受持すれば 聖 人のごとし。また世間の作法兼ねて知るによ じゅじ って注し置くこと、これ違うべからず。現世に云いおく言 生ずるは、その国王、悪を縦にし、治せざるに由る」等 にちれん 日蓮は聖人にあらざれども、 しょうにん しょうにん あく ごしょう ほしいまま うたが せけん 法華経を説のごとく ほけきょう さほうか げんぜ ことば とう

なり、眼目なり。日蓮捨て去る時、七難 必 ず起こるべしと、 去年九月十二日、御勘気を 蒙 りし時、大音 声を放ってよば の違わざらんをもって、後生の疑いをなすべからず。 こぞくがつじゅうににち にちれん 日蓮は、この関東の御一門の棟 梁なり、日月なり、亀鏡 がんもく かんとう ごいちもん ごかんきこうむ にちれん す さ とき しちなんかなら とうりよう とき だいおんじょう はな にちがつ ききょう

わりしこと、これなるべし。わずかに六十月乃至百五十月

ろくじゅうにちない しひゃくごじゅうにち

に、 この事起こるか。 こと これは華報なるべし。 けほ う 実果の 成ぜん じょう

時、 とき かがなげかわしからんずらん。

値うや」なんど申す。 世間の愚者の思いに云わく「日蓮智者ならば、何ぞ王難 せけん ぐしゃ もう おも にちれん 日蓮兼ねての存知なり。父母を打つ子 カュ にちれんち しゃ ぞんち ぼ なん う おうなん

り、 あり、 提婆達多これなり。六臣これをほめ、 だいばだっ 阿闍世王なり。仏・阿羅漢を殺し、 た ろくしん 瞿伽利等これを 悦 くぎやりとう 血を出だす者あ よろこ

あじゃせおう

ほとけ

あらかん

ころ

5

日蓮、 にちれん とうせい 当世にはこの御一門の父母なり、仏・阿羅漢 ごいちもん ふぼ ほとけ あらかん

ごとし。 に無慙なる者なり。 むざん かるを、 もの 謗法の法師等が、 ほうぼう 流罪 るざい ほっしとう しゅじゅうとも 主従共に悦びぬる。 みずか 自ら禍いの既に顕 よろこ わざわ あわ れ

彼らが歎き、 るるを歎きしが、かくなるを一旦は悦ぶなるべし。 しょうとを討ち、九郎判官を討って 悦 びしがごとし。 一門を亡ぼす大鬼のこの国に入るなるべし。 う だい にちれん 日蓮が一門に劣るべからず。例せば、 くろうほうがん いちもん おと よろこ よろこ 法華経に云わ ほけきょう 後に 泰衡 やすひら 既に

く「悪鬼はその身に入る」、これなり。

にちれん 日蓮もまた、かくせめらるるも、 先業なきにあらず。 せんごう

ふきょうぼん の無量の謗法の者に罵詈・ 不軽品に云わく「その罪は畢え已わって」等云々。不軽菩薩 ほうぼう つみ ちょうちゃく 擲 せられしも、先業の所感な とううんぬん ふきょうぼ さつ せんごう しょかん

るべし。いかにいわんや、 日蓮、 にちれん 今生には貧窮・下賤の者こんじょう
びんぐ
げせん
もの びんぐ

じょくすい を信じたるようなれども、身は人身に似て畜身なり。 べし。 濁水に月のうつれるがごとし。 を混丸して 赤 白 二渧とせり。その中に識神をやどす。 と生まれ、 のあなずる道理なり。心 もまた身に対すればこそ月・金 に と思わず。身は畜生の身なり。色心不相応の故に、 こんがん つき こころ 心 は法華経を信ずる故に梵天・帝 釈をもなお恐ろ 旃陀羅が家より出でたり。せんだらいえい どうり しゃくびゃく に た い ほけきょう ちくしょう こころ しん ゆえ じんしん ぼんてん 糞嚢に 金 をつつめるなる ふんのう しきしんふそうおう に なか 心こそすこし法華経 たいしゃく こがね ちくしん しきしん 包 ゆえ つき こがね ほけきょう 魚鳥 ぎょちょう 愚者 ぐしゃ

もたとうれ。

また過去の謗法を案ずるに、 かこ ほうぼう あん 誰かしる、 勝意比丘が たれ 知 しょういびく たまし 魂に

余残なるか、 よざん 大天が だいてん たましい 五千上慢の眷属なるか、 ごせんじょうまん けんぞく しゅくごう 神にもや、 不軽軽毀の流類なるか、失心の ふきょうきょうき 大通第三の余流にも るるい だいつうだいさん

やあるらん。 宿業はかりがたし。

えに、 るべし。我、 くろがね せんごう は炎い打てば剣となる。 先業の

重罪を

今生に消して、

後生の

三悪を脱れん う じゅうざい 今度の御勘気は、 こんど ごかんき こんじょう 世間の失一分もなし。 せけん 賢 聖は罵詈して 試 みるな けんしょう ごしょう とがいちぶん さんあく こころ ひと

ずるなるべし。 の中において出家・学道し、 般 はつないおんぎょう 泥洹経に云わく「当来の世、ないおんぎょういいとうらいしょ しゅっけ がくどう とうらい 懶惰・懈怠にして、これらの らんだ 仮に袈裟を被て、 けたい 我が法

して、 ど笑う者は、六師が末流の仏教の中に出来せるなるべし。 ごんきょう 皆、これ今日の 諸 の異道の 輩 なり」 等云々。 この経 文を ほうどうがいきょう して、法華経に「捨閉閣抛」の四字を副えて制止を加えて、 記し給えり。法然が一類、大日が一類、念仏宗・禅宗と号しる たま ほうねん いちるい だいにち いちるい ねんぶっしゅう ぜんしゅう ごう 懶惰・懈怠なるは、これ 仏 在世の六師外道が弟子なりと 仏 見ん者、自身をはずべし。今我らが出家して袈裟をかけ、みものにしん
恥いまわれ しゅっけ けさ 懸 方等

契経を誹謗することあらん。

当に知るべし、これらは 権教の弥陀称 けたい ほけきょう 法華経を「月をさす指、ただ文字をかぞうる」なん ほけきょう み だ しょうみょう こんにち ほうねん いちるい だいにち いちるい ろくし もろもろ いどう やから 名 ばかりを取り立て、「教外に別伝す」と号 しゃへいかくほう まつりゅう ほとけざいせ ろくしげどう ح ゆび ぶっきょう もんじ なか しゅったい とううんぬん きょうげ ねんぶつしゅう ぜんしゅう ごう せいし べつでん きょうもん ごう ほとけ

うれえなるかなや、 涅槃経に 仏 光明を放って地の下 んぎょう ほとけこうみょう

法華経の いっぴゃくさんじゅうろくじ ごく ほけきょう いっせんだいにん 一百三十六地獄を照らし給うに、 一闡提人と申して、 彼らがうみひろげて、今の世の日本国の一切衆生とな かれ 寿量品にして皆成仏せる故なり。ただし、じゅりょうほん みなじょうぶつ ゆえ もう て ほうぼう 謗法の者ばかり地獄守に留められたり いま たも もの 罪人一人もなかるべし。 ざいにんいちにん にほんこく じごくもり いっさいしゅじょう とど

念仏者にて、数年が 間 、法華経の行者を見ては、「いまだ ねんぶつしゃ れるなり。 にちれん 日蓮も、 過去の種子すでに謗法の者なれば、今生に かこ すうねん あいだ しゅうじ ほけきょう ほうぼう ぎゅじゃ とう こんじょう

一人も得る者有らず」「千の中に一りも無し」等と笑いしな

が身に謗法なき由をあながちに陳答して、「法華経の門を閉 はさておきぬ、天台・真言等の人々、彼が方人をあながち じよ」と法然が書けるを、とかくあらがいなんどす。念仏者 甲斐なし。この罪消えがたし。いかにいわんや、過去の謗 て自然と云い、今の人は謗法を顕して扶けんとすれば、『世祖ん』い』、いま、ひと、ほうぼう』あらわ にたす の白きも先業のつよくそみけるなるべし。外道は知らずし って悦びしが、酔いさめて後歎きしがごとし。 しろ 心中にそみけんをや。経文を見候えば、鳥の黒きも鷺 しんちゅう よろこ ほうぼう 謗法の酔いさめて見れば、酒に酔える者、 ほうぼう ょ 醒 み さけ よ もの せんごう 染 つみ よし てんだい しんごんとう きょうもん のちなげ み そうら ちんとう ひとびと ほけきょう からす 歎けども くろ ۲ 父母を打 ねんぶつしゃ ほうぼう

にするなり。

御往生疑いなしと書き付けて候を、山僧等の流されたる、ごおうじょううたが かっっ そうろう さんそうとう なが ず。一切衆生に念仏を申させ給いて 候 この大功徳に わく「法然上人は法華経を抛てよとかかせ給うにはあらほが、法然上人は法華経を抛てよとかかせ給うにはあらます。なげう いんしょうぼう もう 印性房と申すは念仏者の棟梁なり、日蓮が許に来って云い こ と ししょうがつじゅうろくにち じゅうしちにち 今年正月十六日、十七日に、佐渡国の念仏者等数百人、 いっさい しゅじょう てらほっしとう ねんぶつしゃ とうりょう ねんぶつ ょ もう たま ょ さどのくに そうろう にちれん ねんぶつしゃとうすうひゃくにん だいくどく そうろう

ならびに寺法師等、『善きかな、善きかな』とほめ 候 を、 はるかにはかなく 候 ぞ。 いかんがこれを破し給う」と申しき。鎌倉の念仏者よりも、 そうろう たも 無慙とも申すばかりなし。 むざん もう もう かまくら ねんぶつしゃ

いよ 日蓮が れん で せんじょう 生 · 今 生 こんじょう 先日の謗法おそろし。 せんじつ ほう ぼう カン

カン かになるべしとも覚えず。 り け る者の弟子と成りけん、 おぼ かかる国に生まれけん、

の悪業を作るに、この あくごう はつないおんぎょう 泥洹経に云わく「善男子よ。 もろもろ 諸 ぜんなんし の罪報は、あるい ざい ほう 過去に無量の諸罪、 か むりょう は軽易せら きょうい しょざい しゅじゅ

あ に利あらず、 るいは形状醜陋、 ぎょうじょうしゅる 貧賤の家および邪見の家に生まれ、 ひんせん いえ 衣服足らず、飲食麤疎、 えぶく た じゃけん おんじきそ いえ そ たから 財 を求むる あるいは も と

苦報あらん。 おうなん に遭う」等云々。また云わく「および余 あ 現世に軽く受くるは、これ護法の功徳力に由る とううんぬん げんぜ う ごほ う 種 くどくりき セクの

は「飲食麤疎」、 يح. が故なり」等云々。このゆえとううんぬん 人に軽易せられん。形状端厳をそしれば醜陋の報いを得。
ひと きょうい が身に感ぜり。 二には「あるいは形状醜陋」、三には「衣服足らず」、四にに 「貧賤の家に生まる」、七には「および邪見の家」、八にはてんせんにえ 「あるいは王難に遭う」等云々。この八句は、ただ日蓮一人 ほとけ 高山に登る者は必ず下り、我人を軽しめば還つて我が身こうざんのぼものかならくだっれれひとから 仏の妄語となりぬべし。一には「あるいは軽易せらる」、 おうなん 五には「財を求むるに利あらず」、六にはご たから もと り たから とううんぬん 経文は、 もと にちれん 日蓮が身なくば、 はっく きょうい ほとん

人の衣服 ^{ひと}えぶく 笑えば貧賤の家に生ず。正法の家をそしれば邪見の家におら ひんせん いえ しょう しょうほう いえ 護 じゃけん いえ しよう の因果の定まれる法なり。 生ず。 いんが 善戒を笑えば国土の民となり王難に値う。これは常いない。 さだ ・飲食をうばえば必ず餓鬼となる。

おんじき 奪 かなら がき ほう こくど おうなん 持戒・尊貴を

せし故に、法華経は、月と月とを並べ、星と星とをつらね、 日蓮はこの因果にはあらず。 ゆえ ほけきょう いんが つき つき 法華経の行者を過去に軽易 ほけきょう なら ほし ぎょうじゃ ほし きょうい

華山に華山をかさね、玉と玉とをつらねたるがごとくなる おんきょう 御経を、 かざん あるいは上げ、あるいは下して嘲弄せし故に、 重 たま たま ちょうろう ゆえ

この八種の大難に値えるなり。この八種は、

尽未来際が 間

じんみらいさい

はっしゅ

一つずつこそ現ずべかりしを、 日蓮つよく法華経の 敵を責 強 ほけきょう

起こるがごとし。「これ護法の功徳力に由るが故なり」等は むるによって一時に聚め起こせるなり。譬えば、民の郷郡なむるによって一時に聚め起こせるなり。譬えば、民の郷郡ないるによっていまっていまっている。 んどにあるには、いかなる利銭を地頭等におおせたれども、 いたくせめず、年々にのべゆく。その所を出ずる時に競い

甚 責 ねんねん 延 ŋ くどくりき せん じとうとう ゆえ

がしやく 瓦石を加うるもの有らん乃至国王・大臣・婆羅門・居士に向 法華経には「 諸 の無智の人の、 ほけきょう くわ もろもろ ない しこくおう ひと 悪口・罵詈等し、刀杖 だいじん ばらもん とうじょう

これなり。

かって乃至しばしば擯出せられん」等云々。獄卒が罪人を責いって乃至しばしば擯出せられん」等云々。獄卒が罪人を責

ひんずい

とううんぬん ごくそつ

ざいにん

めずば、地獄を出ずる者かたかりなん。 もの 当世の王臣なくば、 おうしん

日蓮が過去謗法の 重 罪消し難し。 カュ こ ほうぼう じゅうざい け

にちれん 日蓮は過去の不軽のごとく、当世の人々は彼の軽毀の四 ふきょう とうせい ひとびと カュ きょうき

衆のごとし。人は替われども因はこれ一なり。父母を殺せ ひとこと ひと おな か むけんじごく いん いち ふきょう

る人異なれども、同じ無間地獄におつ。いかなれば、不軽 ぎょう にちれんいちにんしゃかぶつ しょにん

因を 行 じて日蓮一人釈迦仏とならざるべき。また彼の諸人 せんごうあ び じ ご く

は跋陀婆羅等と云われざらんや。ただ千劫阿鼻地獄にて責 ばっだばらとう

き。彼の軽毀の衆は、始めは謗ぜしかども、後には信伏随従 められんことこそ不便にはおぼゆれ。これをいかんとすべ きょうき ふびん はじ のち しんぷくずいじゅう

程の大苦をうく。当世の諸人は とく無数劫をや経んずらん、三・五の塵点をやおくらんず せりき。 むしゅこう 罪多分は滅して少 分有りしが、父母千人殺したる とうせい しょにん しょうぶん あ さん ひるがえ 翻 す心なし。譬喩品のご こころ じんてん ふ ぼ せんにんころ

にちれん これはさておきぬ。日蓮を信ずるようなりし者どもが、 うたが にちれん 起 ほけきょう

念仏者よりも久しく阿鼻地獄にあらんこと、不便とも申す ねんぶつしゃ らず、かえりて日蓮を教訓して我賢しと思わん僻人等が、 日蓮がかくなれば、 疑 いをおこして法華経をすつるのみな ひさ にちれん きょうくん あびじごく われかしこ おも びゃくにんとう もう

ばかりなし。

らんほう 鸞鳳をわらうなるべし、わらうなるべし。南無妙法蓮華経。 わらい、蟻塚が華山を下し、井江が河海をあなずり、烏鵲が やわらかに法華経を弘むべし」と云わんは、蛍火が日月を く「仏は一究竟道、 「日蓮御房は師匠にてはおわせども余りにこわし。我らは にちれんご ぼう ほとけ ありづか いちくきょうどう 「仏は十八界、 ほとけ ほけきょう ししよう かざん じゅうはっかい われ ひろ 我は九十五究竟道」と云いしがごとく、 くじゅうごくきょうどう われ 我は十九界」と云い、外道が云わ せいこう じゅうくかい かかい あま なんみょうほうれんげきょう ほたるび にちがつ かささぎ

にちれん で し だんなとうおんちゅう 日蓮弟子檀那等御 文永九年太歳 壬 申 三月二十日 ぶんえいく ねん たいさいみずのえさるさんがつ はっつ か さどのくに かみそうら うえ めんめん わずら にちれん 花押 かおう

佐渡国は紙 候 わぬ上、面々に申せば 煩 いあり。一人も

寄り合って御覧じ、料簡候いて、心なぐさませ給え。世間ょ ぁ ごらん りょうけんそうら こころ 慰 たま せけん もるれば恨みありぬべし。この文を、心 ざしあらん人々は

当時の軍に死する人々、実・不実は置く、いくばくか悲しとうじいくさいしょのとびと、じついるじつおりと

らん。かわのベ山城得行寺殿等のこと、いかにと書き付け かるらん。いざわの入道、さかべの入道、いかになりぬ やましろとくぎょうじどのとう にゅうどう 酒 にゅうどう

て給ぶべし。外典抄、貞観政要、すべて外典の物語、八宗 げてんしょう じょうがんせいよう げてん ものがたり はっしゅう

の相伝等、これらがなくしては消息もかかれ候わぬに、 そうでんとう そうろう しょうそく そうら

かまえてかまえて給び候べし。